

駿建 2020 Apr. vol.48 No.1

日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科

SHUNKEN

Quarterly Journal of

*Department of Architecture, College of Science and Technology, Nihon University
& Department of Architecture and Living Design, Nihon University Junior College*

SPECIAL FEATURE

だから
建築は
面白い

[研究室紹介編パート1]

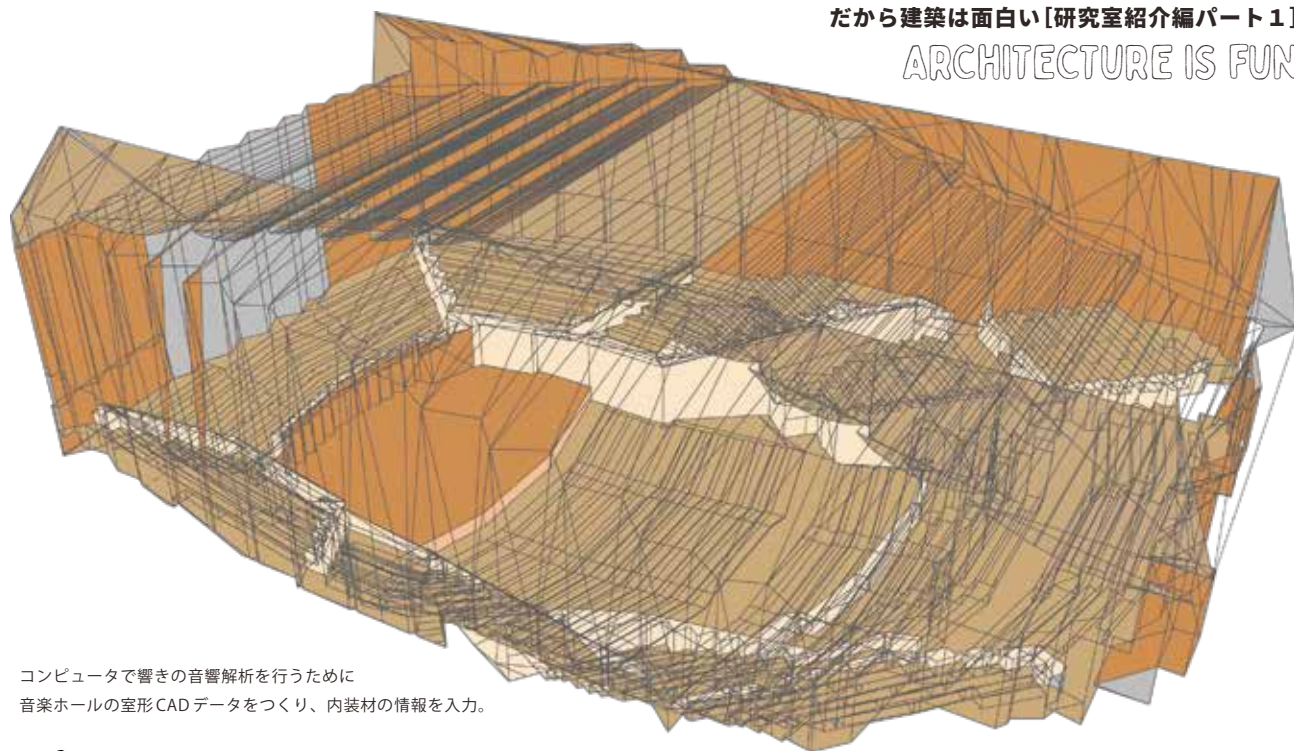
SPECIAL FEATURE

だから 建築は 面白い

[研究室紹介編パート1]

春です。新入生、進級生の皆さん、改めて、建築の世界へようこそ！ なんとなく建築学科に入った人にも、建築家になるぞ！ と意気込んでいる人にも、とりあえず伝えたいことは、お世辞抜きで「建築って本当に面白い分野なんです！」ということ。じゃあ、どんなところが面白いの？って聞かれると、あれもこれもとたくさんあります。だから今回は、各研究室の先生や研究室に所属する、関係する人たちに、建築の面白さについて聞いてみました。次号と合わせて、理工建築と短大の全研究室が登場します。建築って、どんなところが面白いのですか？

ARCHITECTURE IS FUN



コンピュータで響きの音響解析を行うために
音楽ホールの室形CADデータをつくり、内装材の情報を入力。



環境・音響工学 研究室の

橋本修 先生(理工教授)が考える“建築の面白さ”

響きを生み出す音楽ホール そのものが「楽器」である

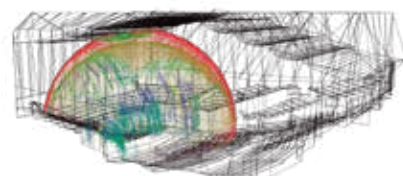
大 学生の頃はステレオ鑑賞とギターを趣味に持つ音楽ヲタク族のひとりでした。そんな自分がホール音響の研究を行っているゼミに魅せられたことは必然でした。でも、環境・音響工学の勉強は奥が深く、先生や先輩から教えてもらう音響学と自分の音（音楽）体感が全く結び付かず、モヤモヤしていたことを覚えています。

そんなある日、「東京文化会館でコンサートがあるけど行く？ 指揮はC.クライバーだから超強力だよ!」と、クラシック音楽愛好家の先輩から1枚のチケットを譲ってもらいました。自分でお金を払って行ったはじめてのクラシック・コンサートでした。指揮者のタクトが振り下ろされた瞬間からアンコールの「雷鳴と電光」が終演するまで、私の全身の細胞はタクトが生み出す音楽の魔法によって陶酔状態でした。一糸乱れぬアンサンブル。緩急自在、流麗で活力あるフレーズ。まさに劇的な感動体験でした。

この体験から私の好奇心に火が付き、所持金のほとんどはコンサートと音楽CDにつぎ込まれました。その甲斐があつたか、自分なりに音楽の「聴き方」が身に付き、また、Live演奏体験からわかったことは、演奏会場が異なると演奏音の聴こえ方が変わること、同じ音楽ホールでも客席の位置によって響きが異なること、そして、響きを生み出すホール空間そのものが「楽器」であることでした。ホールは音楽を仲立ちとした人と人とのコミュニケーションの場。その場となる空間を創造することは、実に面白い！ 音響学と建築がようやく頭の中でリンクして、「あ～楽しくなってきたな～」と思いはじめたのは、大学院2年の終わり頃でした（笑）。

その後、縁あって建築学科の教員となり、相変わらず楽しい音楽体験を続けながら、現在は舞台上の演奏者の立場から見た音響や声の伝達性、パブリック空間の音についての研究も行っています。これらの音環境の研究はもとより、光環境にも取り組みながら、人の感覚を通した建築空間の思考の旅を続けていきたいと思っています。

■



舞台上の演奏音がホールに伝搬・反射していく過程を視覚的に表示。演奏者と聴衆に対する反響を分析。



演奏者に対するヒアリング実験を通して舞台空間内の反響がアンサンブル演奏に与える影響を考察。

音楽の劇的感動体験で
好奇心に火が付いた



建築音響 研究室の

一柳薫 さん(M2)が考える“建築の面白さ”

さまざまな分野の 個性豊かな先生との交流も

大学へは、建築のデザインを学びたくて入学しました。というよりも、建築の仕事についてあまり知らず、建物をデザインしたり、住宅の間取りを考えていくのが、「建築」の仕事であると考えていました。しかし、建築はデザインする（意匠）だけではなく、構造や環境、歴史、材料など、さまざまな分野が組み合わせることで成り立つ学問であることを、後に大学で知りました。分野も範囲も広く覚えることがたくさんあり、大変な学問だなと思いましたが、同時に、専門分野に対しての選択肢が広く、さまざまなことが学べ、飽きの来ることがない学問かもしれないとも感じました。

建築学の知識を深めていくうちに、熱や音、光など、人々が快適な生活環境を考える上で最も密接である建築環境工学の大切さを学びました。中でも、住宅内で発生する騒音に対して関心があったため、現在、建築空間の音環境について研究を行う研究室に所属しており、日常生活で発生する加振力について研究を行っています。実際に問題として挙げられている騒音や環境振動について研究に取り組んでいるため、社会に対して役立っている実感が湧きます。意匠系にはコンペなど対外的に発表する場があり、それ以外の分野はひたすら実験や解析を行っているだけだと思われがちですが、学会などで研究成果を発表することはしばしばあります。学会の場では、他人からの評価をもらったり、意見を交わすことで、さまざまな知識が身に付き、自分の成長を感じることができると感じます。

最初に書いたように、建築学科にはさまざまな分野があり、いろんな先生がいらっしゃいます。個性豊かな先生たちと交流し、考え方を学ぶことができるのもひとつの魅力だと思います。だから建築は面白い。

■



上：現在、研究に取り組んでいる扉の開閉時に発生する加振力・加速度の測定実験の様子。

下：扉の開閉時の測定実験の様子。



建築という学問は、
飽きることもないもの

だから建築は面白い[研究室紹介編パート1]

ARCHITECTURE IS FUN



兵庫県南部地震直後の神戸市内の様子。震災から3年後、進路変更した後に訪れたとき、復興が進む様子を見て気持ちを新たにしました。

(出典：日本建築学会・土木学会編：1995年阪神・淡路大震災スライド集，丸善，1995)



RC 構造・構造解析

研究室の

田嶋和樹

先生(理工教授)が考える“建築の面白さ”

多種多様な生き方の人間を 受け入れてくれる建築の世界

おそらく、私は建築がそれほど好きではありません。建築との関わりはもう25年になるのですから、きっと真実です。私が建築の世界に興味を持ったのは、父親の影響でした。某競馬新聞の記者であった父は、その方面では有名でしたが、建築とは無関係でした。そんな父親との会話に、なぜか時折、建築家が登場したことを覚えています。父に憧れていた私は、自分の名前が世の中に残る仕事をしたいと考えていました。そして、父との会話を通じて、正体が良くわからない建築の世界が私に近付いてきたように思います。

建築学科への進学を控えた高校3年生の冬、兵庫県南部地震が発生しました。テレビに映し出される被災地の光景は、私が想像していた建築の世界とは異なる姿でした。そして、建築の世界に生きることをしばらく考えていたように思います。

その後の大学生活では、まさに運命的な出会いを経験しました。3年生のときには、非常勤講師をされていた建築家の坂茂氏と出会い、建築家の仕事の素晴らしさを知るとともに、その道を諦める決断をしました。建築設計以外の世界に進路を変更し、4年生になって白井伸明教授の研究室の門を叩くと、鉄筋コンクリートの難解な世界に魅了されました。ひたすら研究に夢中になり、27才まで学生を続ける決断をしました。

そして、今。巡り巡って兵庫県南部地震を通じて高校生のときに考えたことが研究のモチベーションになっており、論文を通じて自分の名前を世の中に残せるようになりました。私は建築がそれほど好きではありませんが、鉄筋コンクリートの研究は大好きです。建築の世界には、紆余曲折する人生を許容し、建築がそれほど好きではないという人間ですら受け入れる懐の深さがあります。だから建築は面白い。

駿



大学4年生のときに中学校で教育実習を経験。研究の面白さを知るまで、数学の先生を目指していましたが、建築の世界に戻ることに。

建築家は諦めたけど
鉄筋コンクリートに惹かれて
建築の世界へ戻ること



短大酒匂・佐藤

研究室の佐藤先生と共同研究中の

鹿糠嘉津博

さん(カヌカデザイン代表取締役社長)が考える“建築の面白さ”

かぬか・かつひろ：青森県三沢市出身。1988年工学院大学卒業。1988年堀江建築研究所入社。1990年カヌカデザイン設立。2006年日大佐藤研との協同研究スタート。2008年KD擁壁特許取得。2009年KD建設設立。2017年KDパイル特許取得。2018年KDパイルBCJ評定取得。

擁壁は生命と財産を守る インフラである

私は、横浜で擁壁の新築・改修を主体とする建築事務所を営んでおり、短期大学部建築・生活デザイン学科の佐藤秀人教授と、新しい形態の擁壁（KD擁壁）の開発に関して長く共同研究を行っています。KD擁壁は、擁壁の前・背面を杭で支持したものであり、耐震性も高く、擁壁面を比較的自由にデザインできるという長所を持ったものです。

KD擁壁の主な特徴は以下のようなものです。

- ①地盤の悪い土地でも耐震性・安全性を確保できる
- ②従来は重機が入れず施工できなかった狭隘地^{きょうあい}でも対応可能
- ③掘削範囲が小さいので、擁壁上面に建つ既存の建造物を壊さず構築できる
- ④擁壁が垂直のため敷地面積が増え、土地をより有効活用できる
- ⑤底盤（擁壁基礎に設けるスラブ）が必要なく、使用する建材量も少ないので、工期が短縮でき、環境に優しくコストも抑えられる
- ⑥デザイン性が高く、景観にも配慮できる
- ⑦施工後は安心・安全のための擁壁保険が用意されている

これまでに多くの擁壁の設計・施工を行ってきましたが、擁壁は傾斜地に建てることが多いため、常に3次元的な空間の広がりを感じながら設計しなければいけません。これには、私が若い頃に携わった大スパン架構の高層ビルの構造設計（新横浜グレースホテル）での経験が活かされています。

擁壁の倒壊によって生じる事故の責任は、自然災害に起因して発生した場合であっても、擁壁の所有者が負わなければいけません。昨年の台風15・19号では各地で擁壁の倒・崩壊が発生しましたが、それらの擁壁の多くは、古い法制下で建造され、現在の法律では許可されない、いわゆる「既存不適格擁壁（大谷石、ガンタ積み、二段擁壁など）」でした。先日、逗子の土砂崩れに通行中の高校生が巻き込まれて死亡する事故がありましたが、全国には同様の危険な箇所（擁壁）がたくさんあります。数年前に小学校のスクールゾーンの狭隘道路に面した既存不適格擁壁を改修する事案がありましたが、完成後には、「これで安心して通学できる」「緊急車両の通行も可能になりました」と多くの方々から感謝の言葉をいただきました。だから建築（工作物）は面白い！

【図】



東京都練馬区の宅地造成に伴って築造した擁壁。上段の2棟分の宅地地盤を単一の擁壁で支持している。擁壁の前面にプレキャスト化粧板を張り付けたもので、ハウスメーカーによるデザイン賞を受賞した。



横浜市中区で個人住宅用に築造した擁壁。傾斜の大きなひな壇状の宅地で、擁壁の一部を車庫として利用する案とした。施主（英国人）への説明用に作成したスケッチ。

擁壁の新たな可能性を創造する



地上積雪が1mでも屋根には雪が積もらなかったという徹底した屋根雪処理された膜構造（室内練習場）。



鋼構造・対雪設計

研究室の

中島肇

先生(理工教授)が考える“建築の面白さ”

“ものづくり”の醍醐味 発想・想像力と創造力

建 築の何が面白いかというと、何と言っても“ものづくり”ではないでしょうか。住宅から、高層ビルや塔などの高い建築、あるいは体育館や野球場、スタジアムなどの広い空間の建築まで、規模や用途にかかわらず“ものづくり”が実践されます。“ものづくり”には、まず発想する力と想像する力が必要ですが、それらをどのようににつくっていくかという創造する力も大事だと思います。

構造設計者は、重力、自然（地震、風、雪……）を対象にして安全な建築を設計します。自然の力は計り知れず、時として私たちの想定を超えるような猛威をふるいます。私たちはこのような自然に対して、真摯で謙虚な姿勢で臨みながらも、安全性を確保しなければなりません。地震、台風、大雪に対して安全な建築を設計することは構造設計の前提となります。その上で、美しく豊かな空間の構成や構築を含めて、幅広い領域を考慮した、健全で美しい構造デザインを目指しています。また、設計段階で施工方法を考え、施工の中で生じるであろう現象や課題などを予見して、その対策を考案して、実現できる見通しを持つことも設計者として大変重要です。新しい構造システムを提案するときには、挑戦する勇気と共に真摯で謙虚な気持ちが特に大切です。

本当に想像した通りに施工できるのか、機能は発揮されるのか、などの自問自答を繰り返して設計した建築が、トータルでデザインされた美しい構造デザインとなって完成したとき、「だから建築は面白い！」と熱くなる瞬間です。

駿



低ライズドームと立体配置したケーブルを組み合わせ、室内有効高さを確保した張弦ドーム（体育館）。



繊細な柱・梁・テンションネットシステムで支えられた透明感あふれるガラス空間（シンガポールの商業施設）。

他の領域も考慮した
美しい構造デザインを
目指して

高級車よりもスポーツカーよりも
ポンプ車が気になるんです



コンクリートポンプ車。一度はどこかで見たことがあるのではないだろうか。会社によってカラーが異なる。



材料施工

研究室の

宮田敦典

先生(理工助教)が考える“建築の面白さ”

職人さんの建築愛の 一助になりたい！

街 中でコンクリートポンプ車を見かけると自然と目で追ってしまいます。恐らく、車好きの人が、重低音を響かせて走るボルシェやフェラーリに目を奪われるような感覚だと思います。あまりジロジロ見ていると変な人だと思われるので、通り過ぎるときに横目で見ています。「どこのポンプだろう?」「このポンプ車キレイだな」いつの間にかこんな風に考えるようになってしまいました。軽度のおタクかもしれません。

大学院に進学し、建築の施工に関するテーマとして、生コンを現場内で運搬するコンクリートポンプの研究をはじめました。もちろん、研究テーマは、コンクリートポンプのマシン自体がテーマではなく、より安全に、円滑に工事をするためにはどうすれば良いか、という施工がテーマです。しかし、当時、コンクリートポンプに関する知識がほとんどなかったので、このときから街中で見かけるコンクリートポンプ車を気にするようになりました。

ありがたいことに、現場で働くコンクリートポンプの専門工事業者、いわゆる職人さんとお話する機会が多くあります。職人さんは、生コンが悪いだの、砂利が悪いだの、飲み会の席でよく愚痴を言います。ただ、よくよく聞いてみると、そのほとんどがより良いコンクリート構造物をつくりたいという思いだということに気付きました。机の上で、文献を読み漁り、パソコンをいじっている僕らや、現場で工事を指揮する現場監督より、よっぽどコンクリート構造物の品質を良くしようと考えていることを痛感させられます。建築は、こうした職人さんによって施工されています。自分が取り組んでいる研究が、いずれ、良質なコンクリート工事の一助となればと考えています。それには、まだまだわからないことがありすぎます。知りたいことがたくさんあります。だから建築は面白い。

駿



ディストリビュータ。施工性に優れているが、適用事例はまだそれほど多くない。



ブーム式コンクリートポンプを用いたRC造建築物への打込み。

だから建築は面白い[研究室紹介編パート1]

ARCHITECTURE IS FUN

卒業設計



建築設計(佐藤光彦ゼミ) 研究室の

佐藤光彦 先生(理工教授)が考える“建築の面白さ”

それは 建築 なのか？

今でも、そのときの光景を鮮明に憶えています。大学を卒業して数ヶ月後の夏、私は薄暗く蒸し暑く天井の低い空間に佇み、黒々とした広大な床に描かれた夥しい数の白線を見つめていました。そこは、就職した伊東豊雄建築設計事務所ではじめて担当した「横浜風の塔」の鉄骨製作工場での原寸検査(※1)の場でした。何の経験もない若造だった私は、設計監理の担当者としてただひとり、経験豊富なゼネコンの監督と鉄工所の主の前で判断を迫られていたのです。ここでの私の決定が、そのまま建築物として実現してしまうことへ畏怖の念を抱きながらも、不思議と冷静に振る舞いつつ、修正する円弧や焦点の組み合わせをその場で考え指示していました(※2)。卒業設計では、とても建築には見えない記号の群れのような抽象的な図を描いていた私が、リアルなスケールと共に具体的な物質として立ち上がる建築の現場にはじめて立ち会った瞬間でした。

『我々は 人間 なのか?』は、90年代に『マスメディアとしての近代建築』で一世を風靡したビアトリクス・コロミーナの近著(※3)です。前著でアドルフ・ロースとル・コルビュジエの建築を対照しながら、建築が写真や展覧会などのメディアによって非物質的な意味を増殖させ変質していくことを描き出した著者は、マスメディアからソーシャルメディアへと移行しつつある現在において、建築を含むさまざまなデザインと人間の歴史全体を射程とし、その関係を再定義することを試んでいます。

今、私たちは、ますます非物質化していく社会の中で、建築あるいは建築を設計することの意義について言いようのない不安のただ中にいます。そんなときに勇気付けられるのは、「建築に何ができるのか」(原広司)(※4)や「すべては建築である」(ハンス・ホライン)といった半世紀ほど前の建築家の言葉であつたりもします。圧倒的に遅いメディアである建築について知り、それでも建築によってしかなし得ないことを現代において見つけていく作業はとても魅力的なはず。だから建築は面白い、のでしょうか？

監

※1：当時の鉄工所には、工場的小屋裏を利用した「原寸場」と呼ばれる空間があり、製作する鉄骨図を床の上に原寸で描き、形状や仕口の納まりを確認・修正した上で、フィルムに写し取って鉄骨を製作していました。現在ではCAD上で検討したデータを原寸でフィルムに出力しています。

※2：「横浜風の塔」の平面は楕円形ですが、鉄骨も表面に貼られるアルミパンチングメタルのスクリーンも、楕円で製作することはできません。円の組み合わせで近似させるのですが、それぞれに製作可能な制限があり、工場と現場でのジョイント部分を考慮しながら、製作・施工精度もふまえつつ、極力滑らかな曲線となるような調整が必要でした。ちなみに「横浜風の塔」は、昼間はメタリックなモニュメントのような存在ですが、夕刻になると周囲の音や風などの環境情報をリアルタイムに光のパターンの記号として表す装置としての建築でした。



※3：夫である建築理論家マーク・ウィグリーとの共著。ピー・エヌ・ピー新社、2017年

※4：『建築に何が可能か』 学芸書林、1967年
以下、冒頭部の抜粋：『建築とは何か』という問いは、『人間とは何か』という問いが不毛であると同様に、行動の指標とはなりえない。もし私たちが人間について問うなら、『人間に何ができるか』を問うべきである。同様に建築についても、『建築に何ができるか』と問うべきであろう。



地域デザイン(井本ゼミ) 研究室の

井本佐保里 先生(理工助教)が考える“建築の面白さ”

時代と共に変わっていく様式と 受け継がれていく様式

ケニアのとある農村部。干ばつの厳しい地域で貧困度が高く、いわゆる土と木の枝で建設した伝統「風」の家屋が残っています。伝統建築は、「ヴァナキュラー建築」や「建築家なしの建築」などと形容され語られてきました。

「伝統」を見極めることはとても難しいことです。ケニアの農村部がある奥まった地域でも、キリスト教布教活動に伴うヨーロッパ人の到来以降、円形平面の家屋から矩形的家屋へ、土と木の枝を使った構法から煉瓦造へ、茅葺きからトタン葺きへと、「近代化」が少しずつ進んでいます。しかし、実際に家々を訪ねていくと、屋根だけが、壁材だけが、間取りだけが近代化した、伝統と近代のハイブリッドがほとんど。バリエーションが豊かで、それが各家屋の個性になっていたりします。「土壁の円形家屋が落ち着く」と言うおじいちゃんがいる、大都会のナイロビと行き来するお父さんがいる家庭では、都会で流行りの装飾を母屋に施したりしています。さまざまな場所から持ち込まれた技術や建材、装飾が、入り混じりながら共存している様子が見えてきます。

さて、この地域の土壁はとても弱く、数年で風に倒されたり、屋根が飛ばされたり、雨で朽ちたりします。なので「窓」はなく、あったとしてもとても小さく、決して風上に向けて開口を設けないのがこの土地でのルールでした。そこに建具が持ち込まれ、ガラスが持ち込まれると、風向きを気にすることなく開口がつくられるようになります。様式からの解放です。ただし、どんなに煉瓦で堅牢につくられ、大きな窓のある家屋であっても、母屋の入り口は必ず風下を向いている。その土地と家屋の関係の原点が、こうして引き継がれていきます。



1970年代はまだ円形茅葺きの家屋が多い。ひとつの家屋敷は複数の家屋で構成されている。(出典：Kaj Blegvad Andersen: AFRICAN TRADITIONAL ARCHITECTURE, Oxford University Press, 1978)

伝統と近代化の狭間で
建築の大切なことが見えてくる



現在の家屋の例。一番大事な母屋は煉瓦でつくられている。目の前の樹木下が家具職人である家主の仕事場。



建築計画(佐藤慎也・堀切ゼミ) 研究室の

堀切梨奈子 先生(理工助手)が考える“建築の面白さ”

だから建築は面白い[研究室紹介編パート1]

ARCHITECTURE IS FUN

Special Feature

自分の中の建築らしきものを 探求し続けていく

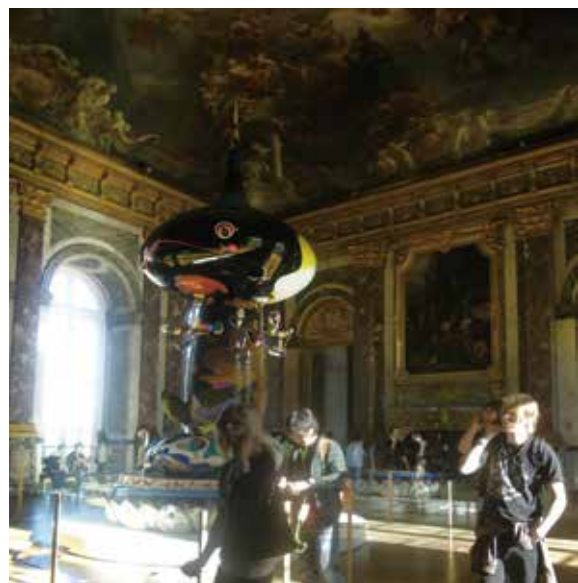
祖 父が小さな工務店を営む私にとっては、長らく「大工さんの仕事＝建築」でしたが、高校では物理がほんの少し得意で「使える力学＝建築」をやってみようと建築学科に入学。多くの同級生が「設計の課題＝建築」に精を出す中、週末に車椅子利用者の生活サポートやフロアバレーボールというスポーツをして、「ユニバーサルデザイン＝建築」にぼんやりと興味を持ちながら、大学生活を過ごしていました。

大学3年生の夏、海外研修旅行の最終日に訪れたヴェルサイユ宮殿で、煌びやかな空間にそびえ立つ村上隆の彫刻“とんがり君”に圧倒され、気付けばそのときに引率だった佐藤慎也先生の研究室に入り、アートプロジェクトや演劇作品の制作現場に通う毎日。お客さんとしても沢山の作品を（お年玉貯金がなくなるほど）観に行きました。

現場はとても楽しいのですが、“演劇と建築は似ている”という劇作家に出会ったり、先生方から“あなたの研究はどこが建築なのか？”と問われ、それまで「〇〇＝建築」と、はっきりとした何かを当てはめていた〇〇がわからず、悶々とした時期でもありました。なんとか修士論文では「芸術活動の場を生み出す仕組みや状況の構造＝建築」として、自分の中の建築らしきものの一部を言語化できたような気がして、そのとき見つけた芸術活動の場をつくる要素（作品やアーティストだけでなく、場所、鑑賞者、運営者、通り過ぎるひと、それらが共有する時間など）を今も考え、楽しんでいます。

そういう意味では、大学の授業や家族、友人、まち、演劇やアートなどありとあらゆるものを通して、いろんな「〇〇＝建築」に触れながら、自分なりの〇〇を見つけていくことが建築の面白さかな、と思います。

駿



ヴェルサイユ宮殿の“とんがり君”。偶然“Murakami Versailles”という展覧会の搬入が終わったタイミングでした。

「〇〇＝建築」
〇〇にあなたは何と
書きますか？



俳優と通りすがりの人がいる、広場での上演風景。『豊島区在住アトレウス家』という演劇作品のワンシーン。(photo= 富田了平)

SHUNKEN 2020

Apr.

vol.48 no.1

011



短大矢代・川嶋・石田

研究室の

石田優 先生(短大助手)が考える“建築の面白さ”

外を見る そして指し示す

19 20年代にモダンデザイン、そして、1970年代にポストモダンが登場して以降、デザインは問題解決のための方法として提示され、新しく想定される未来へ前進する人間の道具としてありました。また、デザインは消費社会の中において、エンジニアリングの発展を踏襲し、絶えず時代の要請に応え続けることで、ファンクショナリズムを加速させていきました。ルイス・サリヴァンの「form follows function（形式は機能に従う）」はモダンデザインの信念であり、ミース・ファン・デル・ローエの「less is more（より少ないことは、より豊かである）」という言葉もこの時代性を誇示するものでありました。そして、ロバート・ヴェンチューリの「less is bore（より少ないことは、より退屈である）」へとアップデートされてゆきます。また、その時代の代表を担ってきたのが、建築デザインであり、プロダクトデザインでありました。

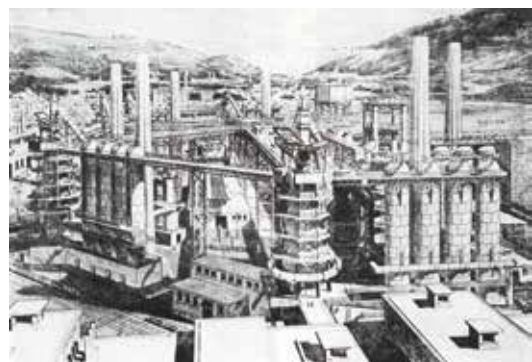
その後の情報化社会の到来によって、それまでデザインの重要なファクターであった「誰／どの企業」がつくったモノなのか、そうした構図の意味性は失われてしまいます。つまり、アマチュアな大衆がこれまでに知り得なかった情報にアクセスし、社会的地位を保ってきたプロフェッショナルな領域を脅かす存在へと変貌し、あたかもプロであるかのような振る舞いを見せるのです。

デザインの価値の対象がモノから経験へとアップデートされ、デザインは新たな経験を生み出すために問題の発掘をすることが主題となった現在。建築デザインは、「デザイン・アート・サイエンス・テクノロジー」などの専門分野を包括的に思考することのできる領域であり、インターセクションとして機能する可能性が潜在していることに疑問の余地はありません。だから建築は面白い。

駿

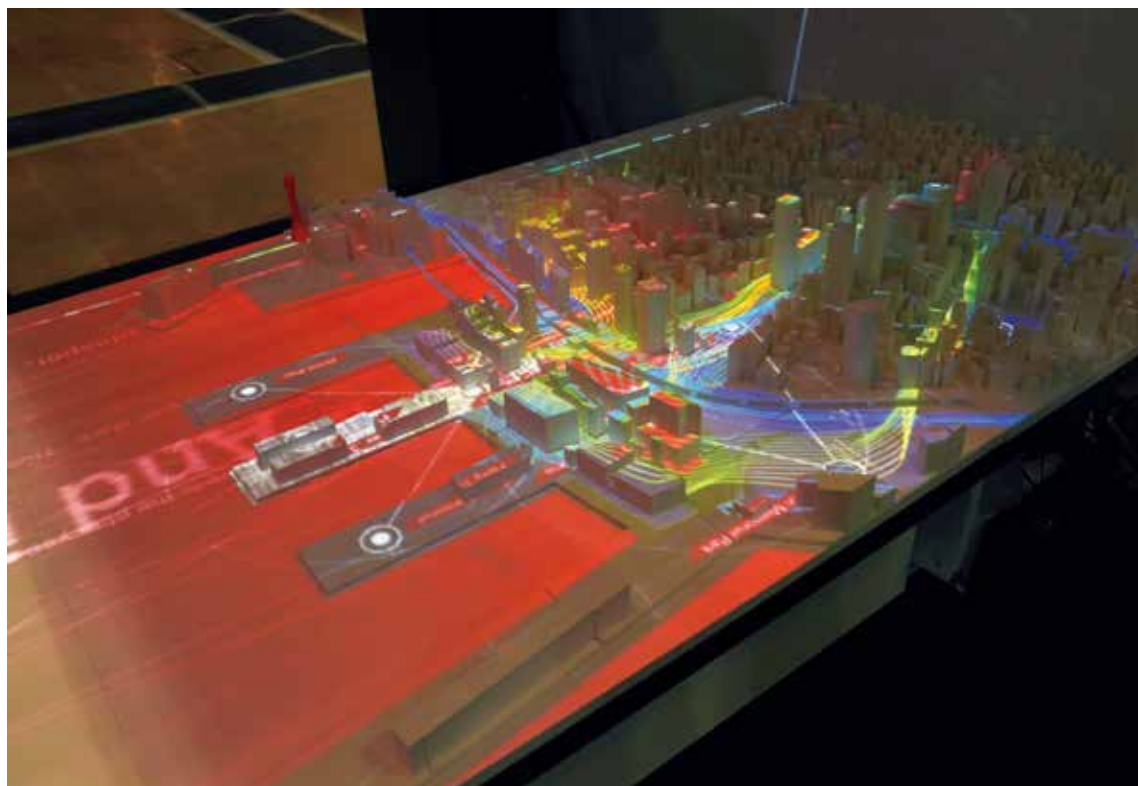


都市計画案 アルティプス（1880／オットー・ワグナー）（出典：Otto Wagner, Modern Architecture: A Guidebook for His Students to This Field of Art, J Paul Getty Museum Pubns, 1987）



工業都市（1901-04／トニー・ガルニエ）（出典：ドーラ・ウィーベンソン、松本篤訳、工業都市の誕生 トニー・ガルニエのユートピア、井上書院、1983）

デザインとは何？
デザインの役割は？



Curating the city : KOBE、シーグラフィアジア 2015 出展（共同作品）



神保町すずらん祭り。路上での古書の販売。一般に歩道に物を置くことは禁止ですが、公共空間を楽しく使う方法もあります。



都市計画 研究室の

宇於崎勝也 先生(理工教授)が考える“建築の面白さ”

暮らしや権利、欲望渦巻く 「都市」をどうつくるのか

「商業39件、景観32件、都市計画制度19件、市街地変容18件、公園・広場14件……」、何の数値でしょうか？ これは、1987年度から2019年度まで33年間の都市計画研究室の卒業論文全288件のうち、上位のテーマ5つです。実にバラエティに富んでいます。このように都市計画の研究は対象が広いのが特徴です。都市の中で問題点や課題を発見したら、まず、なぜなのかを調べてみてください。そのような中から都市計画の研究テーマをたくさん見つけることができます。

都市計画研究室では、卒業論文の取り組みは主にグループで行います。これも特徴といえるのですが、研究過程においてグループ内での意見の調整は大ごとで、揉めることも少なくありません。しかし、社会に出ると多くの業務は組織での仕事・判断となります。グループ研究はこの訓練と考えています。

都市にはたくさんの人々が暮らしています。たくさん人の権利が錯綜しています。たくさん人の欲望が渦巻いています。都市計画は、土木、ランドスケープ、法律、経済、たくさん人の学問分野も関係しています。都市問題は簡単には解決できません。都市内に建つ建築物を「群」でとらえ、その延長に地域・地区、都市がある、それが都市計画研究の立ち位置です。建築物を単体としてとらえることはもちろん重要ですが、建築物が立地するのはほぼ都市空間です。建築物の集合体がもたらす、都市空間の美や機能、効果・役割を考える。それが都市計画です。建築学には都市的視点からの建築物へのアプローチも含まれています。だから建築は面白い。

吸



東京都庁から富士山を眺める。東京都庁から西方を仰ぎ見ると富士山が眺められます。その手前の街並みの評価はいかがでしょうか。



日本橋高島屋の本館（重要文化財・手前）と新館。日本橋二丁目地区市街地再開発事業は開発手法の代表例。重要文化財の雰囲気損なわず地区の更新が図られました。

都市の問題は身の 回りに発見できる

修士論文
環境系

齋藤賞

研究活動で培われる経験は有意義なものになる

生活実感を反映させた環境振動評価基準値に関する研究

後藤佑太さん（M2 | 建築音響研究室）

近年、居住者の要求性能の高まりから、環境振動の問題が増加しています。日本建築学会には環境振動評価規準が設けられていますが、それらは実験室における結果を拠り所に定められたもので、居住者の生活実感を反映させたものではありません。そこで本研究では、生活実感を反映させた評価基準の作成を目指しました。実際の住宅において10分、30分、1日の実験を行い、その結果を参考に、過去1年間の長期に及ぶ生活実感を反映させた環境振動評価基準値を提案しました。

信頼性のある研究結果を出すために、多くの居住者の方々にご協力いただき、実験日程などを調整する作業がとても大変で非常に苦労しました。限られた大学院2年間の中で、あらゆる場面で試行錯誤しながらも、実験や分析、結果のまとめまでを、主体的、計画的に行うことができました。

大学院の2年間で、修論発表を合わせて、計18件の研究発表を行いました。研究に対してさまざまな意見をいただいたり、多くの人と関わることで、互いの知識を共有し、新たな知見を広げる良い機会になりました。今後、この有意義な経験が、社会に出て大いに役立つと考えています。



修士論文
構造系

齋藤賞

責任を感じて学べることはとても貴重な時間

積層ゴムの繰返し依存性を考慮した応答解析手法に関する基礎的研究

- リアルタイムオンライン応答試験を用いた応答評価 -

阿久戸信宏さん（M2 | 免・制震構造研究室）

近年、発生が懸念されている長周期長時間地震動が発生した場合、免震建築物に設置される積層ゴムの水平性能の変化が懸念されています。しかし、その研究に使われているコンピュータ解析ソフトによる数値解析は、建築物や部材をモデル化して、地震動に対する挙動を計算するもので、実際の建築物の部材と同じとは言いきれません。そこで、免震建築物に用いられる積層ゴムの実挙動を再現し、数値解析結果との相違点について検討しました。研究で用いた「リアルタイムオンライン応答試験システム」は、国内でも数少ない試験システムです。実験治具の組み立てや計測機器関係の設定は、すべて自分で行いました。規模の大きな動的加振機を3台用いているため、さまざまなことを考えて行動し、実験していくことは、新しい発見もある中、苦労する場面も多かったです。

積極的に行動していかないと何も進まないということを学びました。学生という立場で責任を感じて学べることは非常に貴重な時間でもあります。研究は難しい場面が多々ありますが、自分の考えと研究の本質がはっきりとリンクしていれば、結果が出たときの喜びはとても大きいです。



修士論文
計画系

吉田鉄郎賞

ゆかりのない地域の人々とのつながりは、貴重な財産に

斜面地における高齢者の外出行動に関する研究

- 静岡県下田市須崎地区の居住者を対象として -

藤田歩さん（M2 | 地域デザイン研究室・山中ゼミ）

卒業論文では、起伏の少ない荒川区に居住する高齢者の散歩行動に関する研究を行い、経路選択の特性や障壁と考えられるものなどを明らかにしました。その後、大学院の研究室活動で静岡県下田市須崎地区を訪ねることがありました。そこでは、階段や斜面、舗装のされていない街路などの障壁が多い斜面地集落に、多くの高齢の方が活発に日常生活を行っていました。この一見バリアが多いと考えられる地域で高齢者は、どのような生活実態や居住意識を持つのかを明らかにしたいと考え、研究を行いました。

具体的には、須崎に暮らす高齢者を対象に、日常の外出行動について調査を行い、斜面地という障壁が高齢者の外出行動に与える影響を考察しました。調査にはGPSロガーを用い、被験者の方々の外出する際の詳細な移動経路の把握を行いました。地域の方々に協力していただく際にも、まず自分の研究がどのような有意性とビジョンを持ち、研究しているかということを、自身の中で確立させることが重要であると実感しました。



大規模浸水地域における地域防災避難施設の設計

- 墨田区京島地区の地域特性に着目した木造住宅密集地域モデルの提案 -

本田偉大さん（M2 | 建築設計研究室・今村ゼミ）

修士1年生で火災対策をテーマとした木造住宅密集地域の設計課題に取り組んだり、ミャンマーで水害対策と生活環境改善をテーマとした学生ワークショップに参加したことが、「水害対策と地域コミュニティ」を修士設計のテーマとしたきっかけとなりました。

2015年に常総市は、豪雨による鬼怒川の堤防決壊で甚大な被害を受けましたが、東京都内でも低地に位置する地域は、豪雨時の荒川堤防の決壊による大規模浸水が予想されています。そこで本設計では、江東5区の木造住宅密集地域である墨田区京島地区を舞台に、地域特性に着目した地域防災避難施設を提案しました。ここでは、津波避難地域に見られる「逃げられればいい」という画一的な構築物ではなく、地域住民が日常的に利用する地域施設が、大規模浸水時には防災避難施設となることを目指して設計に取り組みました。また、どのようなプレゼンテーションであれば大規模浸水に対する危機感や提案の説得力を持たせることができるかを常に考え、「平時－大規模浸水時－復興時」を描いたドラマの動画もプレゼンテーションに加えました。

卒業論文
環境系

桜建賞

課題の糸口を見つけたときが、やりがいを感じる瞬間

実住宅における1日当たりの環境振動評価基準に関する検討

青木怜依奈さん、渡辺帆風さん（4年 | 建築音響研究室）

近年、問題として取り上げられるようになってきている環境振動は、その評価基準が実験室で得られた結果を拠り所としてつくられており、生活実感とは異なることが考えられました。本研究では、生活実感を反映させた長期における環境振動評価基準の提案を最終目標とし、その検討過程として私たちは1日当たりの振動物理量と居住者の振動評価との対応に関する検討を行うことにしました。

実験では、実際の住宅で24時間の振動測定を行い、測定終了後、居住者にその日1日の振動評価に関するアンケートに回答していただきました。測定した1日の振動物理量と、居住者の振動評価との対応をひとつずつ検討していき、最終的に、振動評価の性能に関するランク付けを検討することができました。

何年も積み重ねてきた研究ではなく、基礎的検討段階である研究では、なかなか結果が見い出せず、考察をまとめていくことも手探りの状態でしたが、そのプロセスで考え続けていったことはもちろん、研究内容を発表する機会も含めて、すべてが自分の成長につながっていたと思います。

卒業論文
構造系

桜建賞

自分のひらめきで問題を解決できたときの感動

ヒンジリロケーション梁を用いたRC柱梁接合部の構造性能に関する研究

町田直輝さん（4年 | RC構造・構造解析研究室）

テーマを決められずにいた私は、先生からある大学で行われるヒンジリロケーション柱梁接合部の実験の話を知りました。それは、実験と解析を行うことができるということ、他の大学や企業の方と関わりが持てる機会になること、また、実験が実際の建物への適用を目的としたものであることから、そこにやりがいを感じ、研究テーマとしました。

十字型柱梁接合部は、機械式継手を従来の仕様書通りの位置に設けると、運搬上の制限がかかり、プレキャスト化が困難になります。しかし、梁端部から接合部内に高強度鉄筋を配筋し、降伏ヒンジ位置を継手先端に移動させるヒンジリロケーションという技術を用いることで、その問題を解決することができます。本研究では、十字型柱梁接合部の構造性能の確認と、既往の設計式の検証を目的として、構造実験と有限要素法（FEM）による三次元非線形解析を行いました。

一つひとつの中身を自分自身で考えていくことで、物事に挑む姿勢が能動的に変わっていき、問題にぶつかる度に自分で解決しようと努力することが楽しく感じられるようになりました。



（学年は受賞当時）

卒業論文
構造系

桜建賞

社会に役に立つことだと思えば、卒論が楽しくなる

一般的な間隙比関数を用いたせん断剛性の評価

- 種々の砂質土に対する検討 -

増形響さん（4年 | 地盤基礎研究室）

建築の基礎設計を行う際に重要なパラメータとされている、地盤のせん断剛性についての研究を行いました。せん断剛性の研究は多くの研究者が行ってきており、一般的な評価式は示されていますが、基礎を施工する場所の地盤の種類が、砂か、粘土か、などによって式のパラメータが異なり、せん断剛性の値が変化します。既往の論文では、地盤の種類により変化するのではなく、ひとつの式にまとめることができると指摘されており、私はそれらの論文を参考に、地盤の種類に関係なく使用できるせん断剛性を検討することを研究しました。

実験では、砂の挙動を確認するのですが、準備から実験までのすべてをひとりでやり、成功するまで何回も繰り返していきます。ひとつの実験で十数時間かかることもあり、とても大変でした。砂とにらめっこをしながら、失敗したらデータも時間もすべてが無駄になります。それでも、大変な分、次の知りたい実験データがわかったときの嬉しさは大きかったです。なぜこの研究が必要なのか？という根本的な問いに、研究の本質が見えていったことも、研究を進めていく大きな励みとなりました。



卒業論文
計画系

桜建賞

無秩序なものから関連性が見えてくる爽快感

インドネシア・バリ島における伝統的集落の構成

- 伝統的集落全体の構成および住居概念の構成パターン分析 -

森田光さん（4年 | 建築史・建築論研究室）

大学2年生のとき、旅先のインドネシアで、ムスリムが多数を占める国において、バリ・ヒンドゥーという宗教を信仰し、独自の文化をつくり出していたバリ島に惹かれました。そして、山岳地帯のパンプリラン村の集落形式の成り立ちを調べはじめたことが、卒業研究のきっかけとなりました。

バリ島の伝統的な建築書「アスタ・コサリ」をもとにした先行研究はありますが、現地を調査していくと、それに適合しない伝統的集落が多く見られました。そこで本研究では、それらの形式が単に派生・展開したものなのか、元々異なる形なのかということを調査していきました。結果、伝統的集落の形式はバヌア（儀礼ネットワーク）に関連しているのではないかと結論付けることができました。

日本と異なる文化、環境、宗教を尊重しながら、調査を行うことは大変でした。観光客などが入ることのないバリ島の田舎部の集落にホームステイをして、お風呂の代わりにバケツで水を浴びるなど、現地の生活へ入り、現地の方々の信頼を獲得できたことも大きな体験となりました。今後は、より広範囲のバヌアについて調査をしていきたいと考えています。



卒業論文
計画系

桜建賞

わからなかったことが明らかになっていく面白さ

神社境内における建築と舞の場との推移に関する一考察

- 本殿・拝殿・舞殿等と舞の場の配置に着目して -

藤井英さん（4年 | 建築史・建築論研究室）

本研究では、神のために踊りを舞う場に、どのような場所が選定されているのかを明らかにすることを目的としました。これまでの神社史では、舞殿・本殿などの建築そのものの研究は多くありますが、神事との関係は明らかにされていません。そこで、歴史ある神社を、演舞の場を中心に境内の配置関係を分析し、時代を遡ってその空間と本殿・拝殿との関係がどう変化してきたのかを明らかにしました。

具体的には、国宝・重要文化財などに指定されている神社で、平安時代以前に創建された古式の神社、総本社について、各神社の最も正式な儀式における祭祀の場と境内の配置関係に対する文献調査を行いました。報告書などに祭祀の記録があるものや、その他の研究資料、古図などから祭祀形態を追えたものについて、分析を行っていきました。

文献調査が中心でしたが、史料的制約から不明瞭な部分が多く、実証されている資料を探し出すことに苦労しました。中には、小さな古い絵図などを頼りに配置の変化などを読み取っていった神社もありました。



卒業設計 桜建賞

社会に対する問題意識や興味を深く掘り下げる

虚空(つなぎめ)

- 吉本興業と福祉系分庁舎の連携による新たな複合施設の提案 -

瀧川未純さん（4年 | 建築史・建築論研究室）

現代社会の「生きづらさ」という課題に対して、ソフト面だけでなく、建築というハード面からもアプローチしようと取り組みました。プログラムとしては、新宿の吉本興業本社と新宿分庁舎、雑多なゴールデン街などをつなぐことで生まれる新しい複合施設のあり方を模索しました。

“相反する両者が共存し、お互いを作用する場”をつくるために、「笑わせたい人が集う場」と「死にたい人が集う場所」という機能の対比を、「私たちの“日常”である都市」と「その都市の中に点在する生きやすい空気“悪所”」という都市空間の対比とともに空間に落とし込み、その中であえて“虚空”（何もない空っぽな空間）を設けてつながりを断絶することで、認識し合う関係性を生み出しました。

今回の卒業設計では、建築に落とし込めなかった点多かったのですが、設定した社会が抱える問題や、それに対する私の建築的な考え方などを、できるだけ多くの人たちに理解していただけるよう、どう伝えるかを常に模索し続けながら制作しました。



卒業論文 桜建賞

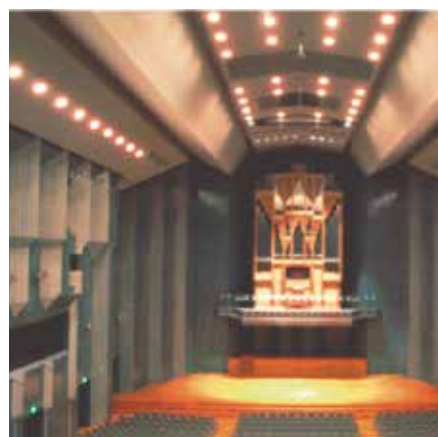
疑問が明らかになると、またひとつ疑問が生まれる楽しさ

福島市音楽堂大ホールの残響可変の検討

旗野真優さん（短大2年 | 羽入研究室）

福島市音楽堂大ホールは、私が高校生のときに所属していたオーケストラ部などでよく利用していたホールです。パイプオルガン用につくられたホールは、壁面の大部分がタイル張りの反射面で、吸音は客席と後壁のみであるために、残響時間が2.5秒と、一般的な設定より約0.5秒長い残響時間となっており、吹奏楽が演奏すると、本来の音楽とはかけ離れた音になっていました。このような経験などから、本研究では演目に応じた残響可変を検討することとしました。

まず、音響シミュレーションソフトにより既存のホールの室形状を作成し、残響時間など室内音響指標を計算しました。そして、開閉式や回転式、ブラインドカーテン、可動式天井の4つの残響可変装置を考え、それらを組み合わせた15の残響可変パターンを検討しました。結果、このホールの室容積で、一般的なオーケストラの最適残響時間である1.9秒をはじめ、吹奏楽や講演などの演目に合わせた残響時間をつくり出せることを証明できました。また、可変装置をいくつか組み合わせることで、単体の可変装置では困難な、きめ細かい残響時間の調整が可能であることがわかりました。



卒業設計 桜建賞

卒業設計は好きなことを活かすことができる

Scenographic Forest -Katsunuma Horticulture Centre-

水上さゆなさん（短大2年 | 矢代研究室）

地元である山梨県の地域を対象として、自然と建築がどのように共存していくことができるかということを考えていきました。自然の中で、山梨県の農産物を、栽培から収穫、そして食するまでの体験を行うことができる建築です。

設計手法として、「人と建築」「自然と建築」「人と自然」の関係性を30程のシーンとして考え、建築に落とし込んでいきました。外の廊下を歩いて見える景色は自然と建築が折り重なり合い、自然の中にまで延長されたベンチが、より建築と自然の境界を曖昧にします。この建築は、自然に取り込まれ、人間の建築から、自然のもとに還ることではじめて完成していきます。

高低差のある既存の地形を利用した配置計画、建築形態、動線計画を、図面と模型を用いて繰り返し検討していくことが大変でした。図面は手描きで描き進めていきました。これまでの課題とは異なり、スムーズに進めることが難しかった反面、あえて手で描くことで、CAD図面では表現できなかった発見をすることもできました。



（学年は受賞当時）

2019年度建築学科就職活動支援報告

TEXT= 宇崎勝也（理工教授）

2019年度の就職活動支援は、主に2021年4月に就職・進学する学生を対象に行いました（3年生・大学院1年生対象）。日本経済団体連合会によるいわゆる「就職協定」の廃止を受けて、政府主導の就活ルールが策定され、従来どおり3年生3月の説明会、4年生6月からの面接開始のルールは存続することになりましたが、インターンシップと称する職場体験・企業紹介の実施時期が大幅に早まることが予測されていました。

建築学科では、例年2月に開催していた「OBOGと学生の懇談会」を、在学生とOBOGとの「出会い」の場として、3月以降の企業説明会へのステップとして広く建設業界を知る機会と位置付けていました。しかし、前述のような状況を受け、「出会い」は夏季インターンシップ開始前に実施することとし、大幅に前倒して、前期試験終了時を開催の目標として設定しました。また、それに合わせて、2回の「就職・進学ガイダンス」を実施し、そのときどきで必要な情報を提供していきました。

10月中下旬開催の「建築設計・研究職等の専門職希望学生への『キャリア教育プログラム』」は、主に大学院1年生を対象に、ゼネコンや組織設計事務所、研究所などの「意匠」・「構造」・「設備」・「開発」・「研究」などの専門職を志望する学生が、直接OBOGから職種ごとの性格や企業が持つ特徴を聞き、アドバイスを得的「職業研究」の場としました。これらの支援の対象となった学生は、本年度の4年生・大学院2年生として就職内定を得るものと思います。結果が楽しみです。

駿

●2019年度就職活動支援行事一覧

- ① 就職情報交換会（6月5日・CSTホール）70社（OBOGおよび人事担当者157名）参加、概要：企業と建築学科による学生の就職活動支援に関する情報交換
- ② 第1回就職・進学ガイダンス（6月11日・S401教室）、概要：建築学科の就職活動支援の概要・スケジュール、建設業界の紹介
- ③ 第2回就職・進学ガイダンス（7月16日・CSTホール）、概要：OBOGと学生の懇談会への参加要領、建築学科就職情報サイトの登録
- ④ OBOGと学生の懇談会（8月1日・スタジオ）：73社（OBOGおよび人事担当者157名）参加・建築学科学生197名参加
- ⑤ キャリア教育プログラム・ガイダンス（9月25日・スライド室）、概要：キャリア教育プログラムの実施概要と参加企業の紹介
- ⑥ 建築設計・研究職等の専門職希望学生への「キャリア教育プログラム」（10月15～28日・スタジオ）30社参加・建築学専攻学生のべ242名参加
- ⑦ 第3回就職・進学ガイダンス（11月26日・S401教室）、概要：就職活動モラルについて、建築学専攻大学院生が語る「大学院のススメ」



第2回就職・進学ガイダンス

駿

MESSAGE FROM OB/OG VOL.10

社会に出て一番大切なコミュニケーション能力を培えた大学院時代

建物をつくるための建築材料（床、壁、天井材、ドア、下地材など）を製造・販売する建築材料メーカーで働いています。所属している音響製品部は“音”に関係する建築材料を取り扱っていて、開発した防音建材の製品を提案・拡販していくことが、主な仕事です。お客様が悩まれていることや懸念されていることをうかがい、解消できる防音建材や防音構造の提案を行っています。また、建築関係の業者向けに防音研修会なども行っています。

人が日常で最も触れている建築材料の世界へ

学部生の頃は、就職ではなく、大学院への進学を決めながらも、どのような企業があるかを調べていました。ただ、そのときはハウスメーカーや設計事務所など、“建物をつくる”という仕事にしか目が向いていませんでした。しかし、大学院に入り、社会人ドクターや研究室出身OBの方々と話す機会が増えていくと、私の研究テーマであった「居住性能」に一番関わりがあるのは、人が日常生活で必ず触れている床やドアなどの“建築材料”なのではないかと、建築材料メーカーに興味を持ちました。やがて、就職活動を進めていく中で、さまざまな建築材料メーカーを調べ、テーマであった「音環境」の専門部署がある大建工業を選びました。

入社後は、希望していた音の専門部署に配属されました。大学院時代に学んだ井上勝夫先生や富田隆太先生のおかげで、音に関する知識は入社してからでも苦労はしませんでした。ただ、お客様が要望する内容を正確に汲み取り、それに合わせて適切な建築材料を提案することが仕事なので、建築にも音にも詳しくないお客様に、専門用語を用いずにわかりやすく説明することがとても難しかったです。この壁を越えるときに思い出したのは、大学院時代の学術講演



上：天井吊り下げ吸音材「KIN TONE（飛行機）」
下：住宅用防音室

長島明日香（ながしま・あすか）

大学院修了年：2010

所属研究室：建築音響研究室（井上・富田研究室）

修論テーマ：住空間における居住性能からみた床仕上げ材に関する検討

勤務先：大建工業株式会社 音響製品部



営業担当向け社内防音研修会の様子。

会や建築学会での発表で、専門外の方にわかりやすく伝える方法を先生方に指導していただいたことでした。学部生時代にはできなかった経験がたくさんできた大学院では、知識面以外でも多くのことを学び、それらは現在の仕事にも大いに役立っています。

日大というコミュニティを自分の財産に

社会へ出て、日大理工建築出身という話をすると、「〇〇先生、知ってる？」と聞かれ、そこから話が広がるが多々あります。日大理工建築は卒業生も多いので、さまざまな分野で活躍されている方がいらっしゃいます。日大がつないでくれた縁で、大きな仕事のチャンスをいただけたこともありました。大学院で得た専門知識はかなりの強みになりますが、最も重要なのはコミュニケーション能力だと思います。日大という大きなコミュニティの中で培ったコミュニケーション能力は、社会人になった今でも財産です。

社会はさまざまな仕事で溢れています。その中で、自分が何に興味があるのか、何がしたいのか、どのような環境で働きたいのかを学生時代に見つけるのはとても大変です。インターンシップや企業説明会で聞いているだけではわからないこともたくさんあると思います。ただ、皆さんは、日本一卒業生の多い日本大学の学生です。インターンシップや企業説明会で気になった企業のOB・OGには積極的に話を聞き、自分がその会社の仕事内容に興味を持てるか、また、社風に合っているかを見極めてください。就職活動をしていく中で、思うようにうまく行かないことも多々あるかと思いますが、それでも、悪い結果は決して引き摺らず、良いご縁を手繰り寄せてください。全国のOB・OGが皆さんの味方です。

■

NEWS & TOPICS

新任紹介

2020年度は、新たに3名の新任教員を迎えることになりました。

泉山 聖威（理工助教）

「場所が豊かになれば、地域、そして都市は豊かになる」。私は都市経営、エリアマネジメント、パブリックスペースが専門です。日常的に豊かな場所をつくり、それが地域や都市でも経営できているか、思想、仕組み、プロセスや方法論を見ています。都市の研究と実践を往復してきたからこそ、今の自分がありますが、母校で学んだ建築や都市の知見が今の自分の基礎です。伝えられることは皆さんに還元したいと思います。一緒に研究や活動をしましょう。



（いずみやま・るい）1984年札幌市生まれ。2007年日本大学理工学部建築学科卒業。2009年同大学院理工学研究科不動産科学専攻博士前期課程修了。2015年明治大学大学院博士課程修了。設計事務所勤務後、明治大学理工学部建築学科助手、助教、東京大学先端科学技術研究センター助教を経て現職。他、ソトノバ共同代表、PlacemakingX日本リーダー。



左上：池袋駅東口グリーン大通りオープンカフェ社会実験／右上：Park(ing)day2019 渋谷宮益坂／
左下：さいたま新都心エリアマネジメントガイドライン／右下：アクティビティ調査（渋谷中央街）

阿久戸 信宏（理工助手）

この度、建築学科の助手を務めさせていただくことになりました。研究分野は振動工学です。私の主な研究テーマは、「リアルタイムオンライン応答試験」という、部材実験と数値解析を複合した試験システムを用いて、地震動に対する部材の挙動を解明することです。助手という立場ですが、学生の皆さんとも年齢が近いので、気軽に接していただければと思います。よろしくお願いいたします。



（あくと・のぶひろ）1995年群馬県生まれ。2014年群馬県立伊勢崎高等学校卒業。2016年日本大学短期大学部建築・生活デザイン学科卒業。2018年同理工学部建築学科卒業。2020年同大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。



環境・防災都市共同研究センターを利用した振動実験の実施（船橋キャンパスウォッチングでの公開実験）。

鈴木 諒一（短大助手）

今年度より短大で助手を務めます、鈴木諒一と申します。私の専門は環境工学で、特に建築空間の音響設計に携わってきました。今後はこれまでの経験を活かし、スタジオ、音楽練習室、住宅などの比較的小規模な空間の設計手法の確立を目指して研究したいと考えております。まだまだ未熟ではありますが、より学生に近い立場で、学生とともに、建築環境工学のさまざまな可能性を追求していきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。



（すずき・りょういち）1990年東京都足立区生まれ。2016年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士前期課程修了。2016～20年株式会社アコースティックデザインシステム。



仕事で音響設計と施工を手掛けた住宅内の音楽練習スタジオ。

NEWS & TOPICS

人事 (理工)

- ・4月1日付の人事で、田嶋和樹准教授が教授に、古澤大輔助教が准教授に、宮田敦典助手が助教に、それぞれ昇格した。重枝豊教授、古橋剛教授が、新たに特任教授として建築学科所属となり、引き続き学生の教育・研究に携わる。また、新しく建築学科のメンバーになったのは、泉山聖威助教、阿久戸信宏助手である。
- ・井上勝夫特任教授が3月31日をもって退職した。
- ・建築学科の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。〈**新任**〉井川博英（デザイン基礎Ⅰ、Ⅱ）、井上勝夫（建築環境工学特論Ⅰ、司法と建築）、菅原雄一郎（デザイン基礎Ⅰ、Ⅱ）、西村崇（建築施工法）、平田真貴（インテリアデザイン）、實神尚史（建築設計Ⅳ）、水野古樹（建築設計Ⅳ）〈**退任**〉安藤勢津子（インテリアデザイン）、大貫浩嗣（建築施工法）、小川博央（建築設計Ⅲ、Ⅳ）、関本竜太（建築設計Ⅱ、Ⅲ）、関谷和則（建築設計Ⅴ）、福西浩之（建築設計Ⅳ）、福山博之（建築設計Ⅲ）
- ・建築学専攻の非常勤講師の新旧交代は以下の通り（敬称略）。〈**新任**〉仲俊治（建築デザインⅠ）、横瀬辰男（建築構造計画演習Ⅰ）、原田公明（建築構造特論Ⅱ）〈**退任**〉小堀徹（建築構造特論Ⅱ）、酒井章（建築構造計画演習Ⅰ）、福山博之（建築デザインⅠ）

人事 (短大)

- ・4月1日付の人事で、星和磨准教授が教授に昇格した。また、新しく短期大学部建築・生活デザイン学科のメンバーになったのは、鈴木諒一助手である。
- ・短期大学部建築・生活デザイン学科の非常勤の新旧交代は以下の通り（敬称略）。〈**新任**〉梅原智洋（建築デザインスタジオⅠ、Ⅱ）、宮坂知明（建築・生活デザインの基礎、建築デザインスタジオⅠ）〈**退任**〉篠崎隆（建築デザインスタジオⅡ）、田中豊（建築施工法）

2019年度グッドデザイン賞において古澤大輔准教授がグッドデザイン・ベスト100を受賞

「2019年度グッドデザイン賞（主催：公益財団法人日本デザイン振興会）において、古澤大輔准教授がリライトと協働で取り組んだ建築作品「コトニアガーデン新川崎」が「グッドデザイン・ベスト100」を受賞した。

第19回住宅課題賞2019において建築学科4年の森野和泉さんが優秀賞3等を受賞

「第19回住宅課題賞2019（建築系大学住宅課題優秀作品展）」（主催：一般社団法人東京建築士会）において、建築学科4年の森野和泉さん（古澤研）の作品「代官山KAMIHITOE」が「優秀賞3等」を受賞した。本賞は首都圏の建築系大学より、設計授業の住宅課題の優秀作を募り展示を行い、その中から公開審査により特に優れた作品を選出して顕彰するもので、本作品は建築学科より「建築設計Ⅳ」の提出作品として出展された。参加39大学52学科、52点から、事前巡回審査、公開審査を経て、優秀賞3点に選ばれた。

第6回関東学生景観デザインコンペティションにおいて建築学専攻2年の宇佐見拓朗君、小川朋大君、小田島立宜君のグループが佳作を受賞

「第6回関東学生景観デザインコンペティション」（主催：関東学生景観デザインコンペティション実行委員会）において、建築学専攻2年の宇佐見拓朗君（古澤研）、小川朋大君（田所研）、小田島立宜君（今村研）の作品「"Akarenga" Base Camp」が「佳作」を受賞した。応募作品18点から、公開審査を経て、最優秀賞1点、優秀賞1点、景観デザイン賞1点に次ぐ佳作2点に選ばれた。

北海道教育大学附属函館中学校の生徒が建築学科を訪問

北海道教育大学附属函館中学校の生徒4名が、インタビューのために中島肇教授を訪問した。これは、同校での卒業論文作成のために行われたもので、構造デザインを中心とした建築に関する26の質問に対し、中島教授が専門的な立場から解説を行った。

- BOOK -

- ・佐藤光彦教授の建築作品「西所沢の住宅」「松庵の住宅」「天沼の住宅」、古澤大輔助教の建築作品「古澤邸」が『現代住宅の納まり手帖』（彰国社）に掲載された。本書は、1990年代以降の現代住宅に焦点を当てたもので、建築的に新規性のある100のディテールが部位別に紹介されている。
- ・古澤大輔准教授の建築作品が「GA JAPAN 160」（2019年9月号）（A.D.A EDITA Tokyo）に掲載された。掲載された建築作品は「古澤邸」「下高井戸の産婦人科」「港北のオフィスビル」で、論考「フレームによる規範と汎用性の拮抗状態」も掲載されている。
- ・井本佐保里助教が設計協力した建築作品「杉並たかいどいちご保育園・グループホームたかいどの里」（設計監理：藤木隆男建築研究所）が「新建築」2019年6月号（新建築社）に掲載された。



「コトニアガーデン新川崎」



「代官山 KAMIHITOE」



「"Akarenga" Base Camp」



「下高井戸の産婦人科」(photo= 平井広行)



「杉並たかいどいちご保育園・グループホームたかいどの里」(photo= 北田英二)

ARCHITECTURE & ME

[連載] 私と建築 vol.99

設計製図という授業との出会い そして卒業設計

自分にとって、建築の設計にのめり込んでいった原点はどこにあるのかと考えてみました。素晴らしい建築や建築家との出会いがあったことは言うまでもありませんが、多くの大学生がそうであるように、大学で建築学科に進むにあたり大きな動機があったわけではありません。

振り返ってみると、建築の世界で設計という行為に関わっているのは、設計製図という授業に巡り合ったからに他なりません。当時から、建築学科の授業の中で設計製図という授業は、授業の形態もそこで求められる内容も独特なものであり、他分野をも巻き込む総合的で中心的なものでありました。設計という行為は、さまざまな方面からの検討を総合的にひとつの解決策として提示する建築をつくる上で、根幹をなす行為のひとつであると認識しています。その行為・思考は、建築の設計に限らず、他の分野でも役に立つ行為・思考であり、それを総合的に授業の中で習得できるのが、設計製図という授業の場であると確信しています。

当時を思い出すと、設計課題の提出の前は、1週間以上、家に缶詰になり、不眠不休でプレゼンテーションに没頭しました。提出の日は、完成した図面を意識が朦朧となる中、フラフラになりながら提出し、そのでき栄えに、TAや同僚から喝采を浴びるのが快感でもありました。建築のプレゼンテーションは、単に図面を綺麗に描くという行為

えいそ・たくお：1959年東京都杉並区生まれ。1982年日本大学理工学部建築学科卒業、卒業設計にて桜建賞受賞。1982～98年久米設計。1998～2014年谷口建築設計研究所、広島市中工場、鈴木大拙館、京都国立博物館他担当。2014年設計計画設立、現在に至る。芸術監督の家にて中部建築賞入賞。2015年より日本大学理工学部建築学科非常勤講師。

text= 永曾琢夫 非常勤講師

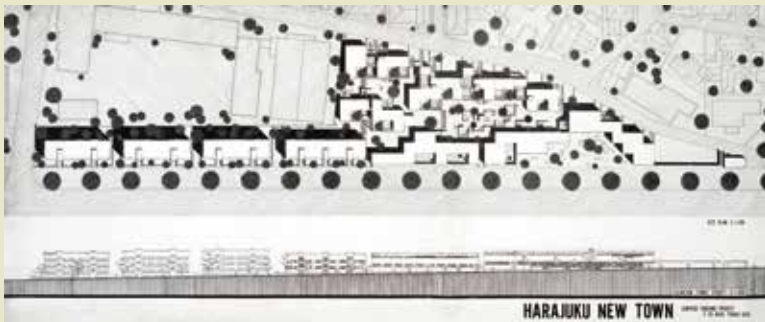
を超えて、建築を実現するためのすべてを含んでいると言っても過言ではありません。

そして、設計製図の授業の延長線上にあったのが卒業設計です。4年になる前の3年の春休みにはテーマを決め、その上で小谷喬之助先生の研究室を選びました。表題は、" テアトロオリンピコにおける真夏の夜の夢のための劇場" という、当時建築界でささやかにはじめていたプログラミングという概念を先取りするものであったと自負しています。結果は、見事、桜建賞をいただくことができ、さらに建築学会の巡回展に出品することになり、卒業設計は全国区になりました。このことで、卒業後も思いがけず、他大学の先生や多くの同僚（まだ、ネットやSNSのない時代で、中学や高校の同期に声をかけられたときは、その影響力にびっくりしました）に声をかけられました。

その後、このテーマが当学科の課題の設定にも影響を与えたと聞き、これまた、随分歳の離れた後輩から声をかけられました。今考えても、信じられないぐらいの集中力とパワーを投じていました。これらのことが自分の活動範囲を広げ、設計という行為に関わる原動力になっていることに間違いはありません。いまだに、図面を描き、模型をつくっている瞬間が最も充実したひとときです。

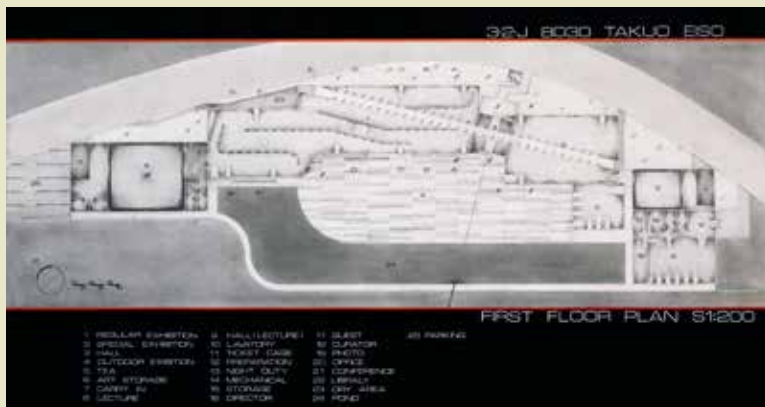
そして今、母校で設計製図の非常勤講師をやらせていただいていることに、責任と幸せを感じています。

駿



学生時代2年生後期の課題「集合住宅」の作品

当時、非常勤講師をされていた三木誠先生、納賀雄嗣先生がポール・ルドルフの事務所に在籍されていたということも影響して、そのドローイングに魅了されて作品集を購入、それを参考にこの図面を描きました。ほぼA1、2枚全面をハッチする（当然手描き）という気の遠くなるような作業です。



学生時代3年生前期の課題「美術館」の作品

当時、早稲田大学ではやっていた平面に影を付けるというドローイングに影響を受けました。しかし、そのドローイングがすべて廃墟のように見えてしまうため、もっと上手く描いてやるという心意気で仕上げました。2、3年時は、T定規1本を持って、いろいろな大学に手伝いに行き、何かを盗もうと必死でした。

Contents

02 [SPECIAL FEATURE 1]

だから建築は面白い [研究室紹介編パート1]

- 01：響きを生み出す音楽ホールそのものが「楽器」である | 橋本修 教授
- 02：さまざまな分野の個性豊かな先生との交流も | 一柳薫 (M2)
- 03：多種多様な生き方の人間を受け入れてくれる建築の世界 | 田嶋和樹 教授
- 04：擁壁は生命と財産を守るインフラである | 鹿糠嘉津博 (カヌカデザイン代表取締役社長)
- 05：“ものづくり”の醍醐味 発想・想像力と創造力 | 中島肇 教授
- 06：職人さんの建築愛の一助になりたい！ | 宮田敦典 助教
- 07：それは 建築 なのか？ | 佐藤光彦 教授
- 08：時代と共に変わっていく様式と受け継がれていく様式 | 井本佐保里 助教
- 09：自分の中の建築らしきものを探求し続けていく | 堀切梨奈子 助手
- 10：外を見るそして指し示す | 石田優 短大助手
- 11：暮らしや権利、欲望渦巻く「都市」をどうつくるのか | 宇於崎勝也 教授

14 [SPECIAL FEATURE 2]

速報！ 2019 年度に受賞した修士論文・設計 & 卒業研究・設計 12

18 [REPORT]

2019 年度建築学科就職活動支援報告 | 宇於崎勝也 教授

19 [Message from OB/OG]

vol.10 社会に出て一番大切なコミュニケーション能力を培えた大学院時代 | 長島明日香 (大建工業 /2010 年修了)

20 [NEWS & TOPICS]

- ・ 新任紹介
- ・ 人事 (理工・短大)
- ・ 2019 年度グッドデザイン賞において古澤大輔准教授がグッドデザイン・ベスト 100 を受賞
- ほか

22 [Architecture & Me]

vol.99 設計製図という授業との出会いそして卒業設計 | 永曾琢夫 非常勤講師

24 [Visit & Criticism]

学生建築探訪 vol.13 「渋谷」見学記 | 稲村浩成・久保開陸・佐藤玲菜・西田美奈・平山茉歩・森野和泉 (4 年 | 古澤研究室)

SHUNKEN

2020 Apr. Vol.48 No.1

「駿建」

発行日：2012 年 4 月 20 日

発行人：佐藤慎也

編集委員：橋本修・山中新太郎・田嶋和樹・

古澤大輔・道明裕毅・堀切梨奈子・山崎誠子

編集・アートディレクション：大西正紀+田中元子/mosaki

発行：東京都千代田区神田駿河台 1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室

TEL：03(3259)0724

URL：http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp

※ご意見、ご感想は右記メールアドレスまで <shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp>



卒業設計

エコール・デ・ボザールのドローイングに影響を受けました。保存状態が悪く、少し色が落ちてしまったのですが、すべての色は薄い水彩を5〜8回塗り重ねないと出てこない深みのある色で仕上げています。卒業設計と同時に、設計プロセスについて、卒業論文に匹敵する内容をプレゼンテーションしました。

Visit & Criticism

学生建築探訪 vol.13

「渋谷」
見学記稲村浩成・久保開陸・佐藤玲菜・西田美奈・平山茉歩・
森野和泉（4年 | 古澤研究室）

今、渋谷の街が大きく変わろうとしています。「渋谷ヒカリエ」の完成から約7年、「渋谷スクランブルスクエア第一期（東棟）」や「渋谷フクラス」といった駅前再開発に加え、渋谷PARCOの建て替え計画「渋谷パルコ・ヒューリックビル」などが完成し、長年にわたって検討が重ねられてきたアーバンデザインが実現されつつあります。今回は、このダイナミックに変革する渋谷を実際に見て歩いた見学記！

西田：よく遊びに行くけど、渋谷は駅前から感じる大きなスケールだけではなく、裏側の路地空間が魅力的なんだよね。昔の渋谷PARCOはヴォリュームが分節されて街になじんでいたけど、今回新しくなった「渋谷パルコ・ヒューリックビル」はワンヴォリュームになってしまったので、あまり街に合っていないように思えた。

平山：昔の状態は知らないのだけど、私は建物の外周部に地上の路地を引き込む立体街路の構成に好感を持てた。たぶん、建築家の内藤廣さんや都市計画課の岸井隆幸さんが提唱した再開発の核となる「アーバンコア」の概念を取り入れたものなのかな？ だけど、

平日に行ってみたら、立体街路は思ったより賑わいがなくて、内部と外部が断絶されている印象を受けて少し残念だったな。

西田：もし賑わっていたとしても、渋谷に来た人の回遊が建物の中で完結してしまうので、街全体にとってどちらがいいのかわからないね。

平山：そうだね。渋谷は多様性を売りにしているのに、高層ビルは内部空間をパッケージ化してしまうので、昔の路地性が失われてしまうのかも。

稲村：でも、僕は新しいソルコの地下のレストラン街（カオスキッチン）は、雑多な感じがして面白かったけどな。この多様性は外国人とかには解りやすくて良いのでは。

森野：でも、それもつくられた多様性だから、結局ワンパッケージによる囲い込みの構図だね。そもそもこれは資本主義の構図そのものだから、建築の中に閉じ込められてしまうのは当然っちゃ当然だと言える。

久保：立体街路は街から見上げるとそんなに見えないけど、実際に歩いてみると僕は気持ち良かった。今まさに生まれ変わろうとしている渋谷の駅周辺を俯瞰する視点を獲得したことは評価できるんじゃないかな。ここから渋谷のイメージが発信されていく可能性を感じた。

佐藤：駅前を俯瞰する視点ができるのは、ここが駅から少し離れているからだよね。駅に近くなるとどうなるのか、ちょっと駅前まで行ってみようよ。

平山：いかんせん複雑すぎるね、渋谷は。人や交通網が入り組み過ぎているから、動線を可視化させる試みの「アーバンコア」が効果的に機能しているか疑問に感じる……。

西田：駅前広場が工事中だからなのか、「アーバンコ

ア」が駅の乗り換え機能に寄与していたとしても、完成形が見えないのが不安になるなあ。

稲村：僕はもともと田舎育ちだから、この混沌とした感じはあまり好きじゃないな。同じ都会でも表参道や代官山のほうに魅力を感じるよ。でも、この違いは何に起因するのだろうか？

平山：街で過ごす時間の質の違いかも。渋谷や新宿はエネルギーで滞留する時間が短いという印象。一方で、表参道や代官山は流れている時間のスピードがゆっくりに感じる。街のアクティビティから感じる速度の違いが、再開発の質に表れているのかもね。

佐藤：私の場合は、むしろ渋谷や新宿のほうに居心地の良さを感じるな。私が思うのは、表参道や代官山は、ゆっくり時間を過ごさなければ「いけない」と感じてしまう堅苦しさ。その点、渋谷のほうが断然時間の選択可能性に富んでいると思うんだよね。

西田：言ってみれば即物的な居心地の良さだね。目的ではなく無目的に過ごす時間って大事だと思う。

稲村：なるほどね。僕はどちらかというと目的的に過ごしたいタイプだということか。都会に来たのに無目的に過ごすなんてもったいない。家が遠いからかも知れないけど（笑）。

久保：「渋谷スクランブルスクエア」の屋上にある「SHIBUYA SKY」からは、東京全体が見えた。東京タワーやスカイツリーのような、観光地的な目的性を持った視点場が、駅前という日常空間にあることが驚きだよ。とてもインターネット的というか。ユーチューブをだらだらと見ていたら、物凄い面白い映像に出会ってしまったかのような感覚！

平山：確かに展望台というのは、稀有で高価なコンテンツだね。でも、こうしたコンテンツがどんどん渋谷の街に溢れたら、価値のインフレを起こすんじゃないかと心配にもなるね。

森野：それは言い換えると、モノである建築の価値が置いてかれてしまうという危機感だと思う。コンテンツ、つまりソフトが日々ダイナミックに更新されていく一方で、ハードのあり方が問われている。超高層という開発手法も近代的な価値基準の範疇だから、私たちはその先を見ていかないといけないよね。 駿



1：開渠の渋谷川と渋谷スクランブルスクエア。2：公園通りから臨む渋谷パルコ・ヒューリックビル。3：夜のスクランブル交差点より渋谷ヒカリエ（左）と渋谷スクランブルスクエア（右）。4：渋谷パルコ・ヒューリックビル地下1F。飲食店の活気が天井と床面に反射する。5：新たな銀座線渋谷駅の改札。6：六本木通り・首都高速道路と歩行者デッキが空中交差する。7：渋谷ヒカリエ（左）と渋谷スクランブルスクエア（右）に銀座線（下）が走る。

「駿建」では、在学生、教員、非常勤講師の皆さまからの、コンペやコンクール、学会、スポーツ大会、その他の受賞・表彰に関する情報提供を下記メールアドレスにて受け付けています。＜shunken@arch.cst.nihon-u.ac.jp＞